

小澤流テニス理論

初・中級者のための簡単テニス（１）

< 目次 >

1. はじめに	1
2. テニスの歴史	2
3. ボルグ / マッケンローの時代	6
4. ベッカー / エドベリの時代	11
5. サンプラス / アガシの時代	12
6. 現在	13
7. 女子テニス界の歴史	14
8. ラケットの進化	15
9. ストローク	16
10. ボレー	17
11. サービス	18
12. リターン	19
13. スマッシュ	20
14. 戦術	21

平成 17 年 2 月 4 日現在、全章完成してません。

が、全章の完成を待つといつまで経っても日の目をみないので、途中まで公開します。

(実はこれ書き始めたのは、去年の 9 月だった・・・「1.はじめに」参照)

1. はじめに

かなり昔(OASYS を使用していた頃) テニス上達に意欲的な新人が入部したことから、彼らのため自分なりにテニス理論をまとめてみようと思い、それなりのドキュメントを書いたことがありました(70 ページくらいあったと思う)。

テニス部のマネージャを引き受けたことで、このドキュメントを再利用できないかと思い、昔のデータをかなり探しましたが、古すぎてやっぱり出てきませんでした。

そこで、テニスのスタイルが当時と比べ大分変わってきていることもあり、新たにまとめてみようと思い、このテキストを作成しました。

テニス初心者を含め、テニス部員のレベル向上に少しでも役に立てば幸いです。

2004.09.17 小澤

2. テニスの歴史

テニスの歴史なんぞ知らなくてもテニス是可以するのですが、トリビアが流行ってることですし、知っいても損ではないので簡単に説明します。

テニスの歴史

複数の人間が1つの球を互いに打ち合うという形態の球技の起源は、紀元前にまで遡ることが出来る。(およそ地球上のどこの人間であれ思いつく種類の行為ではある。)エジプトでは宗教的な行為のひとつとしてこのような球技が行われていた。紀元前15世紀の壁画で球を打ち合う球技を行う人々の姿が描かれたものが発見されている。

エジプトに存在したこの球技は、古代ローマ帝国にもレクリエーションの1種類として引き継がれたが現在のテニスの直接の祖先に当たる球技は、8世紀ごろにフランスで発生し、当初はラ・ソーユ(La Soule)、後にフランス貴族の遊戯として定着をはじめた16世紀以降にはジュ・ド・ポーム(Jeu de paume)と呼ばれた。

フランスでこの球技が盛んになった理由としては、ローマ時代の直接の影響よりも、8世紀から11世紀まで、イベリア半島から南フランスまで進出していたイスラム教徒(ウマイヤ朝)が、エジプト時代と同様に、宗教的行為として行っていたものに、キリスト教の僧侶が興味を持ち模倣したことからはじまったと言われている。(「ラケット」の語源がアラビア語であることに注意されたい。)フランスの僧院で特にさかんに行われるようになったのは、イスラム勢力がヨーロッパから駆逐された12世紀ごろ以降からとされる。

現代のローンテニスに対して、初期のテニスは普通単に「テニス」と呼ぶが、このことはあまり知られていない。「テニス」の名称は「テネズ」(受け取れ、という意味の語。サーバーの掛け声)に由来する。基本的なルールやスコアリング方式はローンテニスとよく似ており、ファイブズ(fives)、ペロタ(Pelota)などのハンドボールから発達した。

テニスはコートは僧院にあり、四方を壁と傾斜した天井に囲まれている。現代のローンテニスのコートより大きい。18世紀から19世紀にかけてヨーロッパの貴族の間で大流行し、たくさんのコートが建造されたが現存するものは少ない。イギリスでは復元されたコートがClifton Collegeにある。近代における貴族階級の遊戯としてのテニスは、イギリスではロイヤルテニス(Royal Tennis)、アメリカではコートテニス(Court Tennis)とも呼んでいる。

中世では、現代のようなラケットは使わず、手のひらでボールを打ち合っていた。手袋を使うこともある。「ポーム」とは手を意味する。ボールは皮製で現代のものよりはるかに重く、弾力性は少ない。サーブは一方の側からのみ行われ、傾斜した屋根を転がるように

打ち上げる。レシーブ側のプレイヤーは、落ちてきたボールが二度バウンドする前に打ち返す。失敗したプレイヤーはポイントを失う。ゲームの最初の第一球の打ち込みが「サーブ」と呼ばれるのは、中世においては、レシーバーにあたる人間の従者が第一球を屋根に打ち上げる役目を行っていたことに起源がある。(従者「サーバント」が主人に対して行う行為は「サービス」) 16世紀には現在のラケットの原型が登場した。これはまだガットは張られておらず、ガットが張られるようになったのは16世紀になってからである。また、この初期のラケットは選手が自作していたそうである。

現代の多くのスポーツとは異なり、ローンテニスの歴史はごく浅い。1873年12月、ウォルター・クロプトン・ウイングフィールド少佐は、イギリス・ウェールズの Nantclwyd にある自分の所有地でガーデンパーティーを開いた。ウイングフィールド少佐はそこに招かれた客を楽しませる余興としてローンテニスを考案した。ローンテニスは、12世紀のフランスで考案されフランス革命まで貴族たちがプレイしていたテニスを基にしている。

テニスの用語はロイヤルテニスで使われるフランス語の用語から命名されている。

テニス(tennis):フランス語の動詞 tenir の命令形で、「受け取れ」(hold)という意味の「テネズ」(tenez)に由来する。これはロイヤルテニスにおけるサーバー側のプレイヤーの掛け声であり、「サーブするぞ！」(I am about to serve!)ということの意味する。ゴルフで「フォア！」(Fore!)というのと似ている。

ラケット(Racquet):フランス語の「raquette」からきているが、この語はアラビア語の手のひら(rakhat)に由来する。

デュース(Deuce):「両プレイヤーは同点」(to both is the game, the two players have equal scores)を意味するフランス語の表現、「a deux le jeu」に由来する。

ラヴ(love):卵を意味するフランス語、「l'oeuf」に由来する。ゼロの記号「0」が卵形をしていることから使われた。

「15」「30」「40」というスコアの数え方は、中世のフランスでは60進法が採用されていたため、当初は、0、15、30、45であったものの、45の5が後に、60進法の廃れた代になって省略されるようになったものだという説が有力である。また、「quinze」「trente」「quarante」という単語が由来するとも言われる。

ウイングフィールド少佐の考案したテニスのコートは、中心部分が細くなっている蝶ネクタイ型をしていた。1874年、ウイングフィールド少佐はテニスに商用としての可能性を見て特許を取得したが、商業的には成功しなかった。しかし、イギリスやアメリカで有閑階級を中心に急速に広まった。アメリカではニューヨークのスタッテン島、メアリ・ユーウィン・アウターブリッジの家で最初にプレイされた。

1881年には競技としてテニスをする望みがテニス・クラブの設立に結びついた。1877年ロンドンで、アマチュアの大会としてウィンブルドンの1回目の選手権が開催された。

1881年には、アメリカ国立ローンテニス協会(今のアメリカ・テニス協会)が、ルールを標準化し、かつ競技を組織化した。全米のシングルス選手権(今の全米オープン)は、ニューポート、ロードアイランド州で1881年に最初に開催された。米国の全国女性のシングルス選手権は、1887年に最初に開催された。デビスカップはナショナルチームの間で1900年から毎年開催されている。

日本では1878年にアメリカのリーランドが文部省の体操伝習所で紹介したものが最初。

ルール

1対1のシングルスと2対2のダブルスがある。トスによって決定された一方のプレイヤーがサーバー、他方がレシーバーとなる。サーバーはベースラインの外から相手コートのサービスエリアでバウンドするようにボールを打つ。レシーバーはサーブされたボールを2回バウンドする前に相手コートに打ち返し、お互いにラリーを続ける。次のようなときに失点となる。

サーブを二回フォルト(ミス)したとき

サーブされたボールがバウンドする前にレシーバーが触れたとき

自分のコートでボールが連続2回バウンドしたとき

自分の打ったボールの1回目のバウンドが、相手のコート外だったとき

ラケット以外の部位がボールに触れたとき

打ったボールが審判に命中したとき

相手コート内でボールに触れたとき

ラケット以外の持ち物をコート上に落としたとき

得点は、0点 ラブ(love)、1点 フィフティーン(fifteen)、2点 サーティ(thirty)、3点 フォーティ(forty)と数える。一方が4点を取ると1ゲーム、4ゲーム取ると1セットと取得できる。5セットマッチなら3セット先取すると勝ちである。ポイントが3-3になるとデュースとなり、相手に2点差をつけるとそのゲームを得る。ゲームカウントが6-6になるとタイブレークとなり、次のゲームは7点先取となる。

使用する用具

ラケット:棒状のグリップの先が輪になっており、そこにストリングが張られている。長さ69センチ、重さは240~380グラム程度。材質はグラスファイバー、カーボン、アルミ、スチール、木など。

ボール:白または黄色、表面はフェルトで覆われている。直径6.35~6.67センチメートル、重さ56.7~58.5グラム。

コート:サーフェスはグラス(芝)、クレイ(土)、アンツーカー、ハード(コンクリート、ゴ

ム)、グラスサンド(砂入り人工芝)など。縦 23.77 メートル、横 10.97 メートルで中央に高さ 107 センチメートルのネットが張られている。

四大大会

全豪オープン (1月)

全仏オープン (5月 - 6月)

ウィンブルドン (6月 - 7月)

全米オープン (8月 - 9月)

四大大会を一年間で全て優勝する事をグランドスラムと呼ぶ。またオリンピックが開催される年には、金メダルも合わせてゴールデンスラムと呼ぶ。

歴史の話なんか大して興味ないかもしれませんが、かなり伝統のあるスポーツであることは理解していただけたかと思います。

テニスから派生したスポーツに、卓球(テーブルテニス)、バレーボールがあります。卓球に関しては、某テニス部員が「独自発生したスポーツ」と言ってましたが、バレーボールに関してはテニスのボレーから生まれたと認識しています(Volley Ball: 日本語読みバレーボール)。

次章以降わたしがテニスを始めてから、これまでのプロテニス界の話をしてみたいと思います。多くのスポーツがそうですが、テニスは長い歴史の中でラケットの進化もあり、そのスタイルも大きく変わってきたと思います。ただし、変わっていないことがあることも見逃せません。過去の話をする理由は、その変わっていないことがテニス初心者には役に立つことだと信じているからです。

3. ボルグ/マッケンローの時代

わたしがテニスを始めた頃は、ビヨルン・ボルグ、ジョン・マッケンローが全盛の時代でした。ジミー・コナーズ（パワフルテニス）、ロスコ・タナー（ビッグサーバー）、アーサー・アッシュ（とにかく美しいフォーム）、ギレルモ・ピラス（オールラウンダー）等の選手が同時期に活躍しており、テニス四大タイトル（全豪、全英、全仏、全米）の中継を見るのがとにかく楽しみでした。まだデカラケなど無い時代で、小さなラケット（当時はそれが当然と思ってましたが）から繰り出されるショットの応酬は、5時間に及ぶような熱戦が多々ありました。勉強そっちのけで、夜遅くまでTV観戦し、授業中寝ててよく先生に怒られました。



ジミー・コナーズ



ロスコ・タナー



アーサー・アッシュ



ギレルモ・ピラス

彼らの時代の前になると、ケン・ローズウォール（テニスの神様）、ロッド・レーバー、ジョン・ニューカム、スタン・スミス等が有名です。スタン・スミスはアディダスの靴に名前が残っているので名前だけ知ってる人もいると思います。更に戦前になると、チルデンベストに名前が残っているビル・チルデン、ワニのラコステの愛称からワニがトレードマークとなったルネ・ラコステ（フランステニス界の四銃士と呼ばれた一人。他はジャック・ブリュノン、ジャン・ポロトラ、アンリ・コシェ。知らないよね～。かく言うわたしも正確な名前は調べた・・・）等の活躍があったのですが、わたしもそのテニスをリアルタイムに見たことがないので、話題はこれくらいにしときます。ちなみに数年前にフレッド・ペリーのポロシャツが流行りましたが、この人もテニス選手です（ポロシャツはその名の通り、「ポロ」という競技で使用されたからこの名前になったと思いますが、英国発祥のスポーツはゴルフ等みんなポロシャツ着ますね）。



ケン・ローズウォール

ロッド・レーバー

ジョン・ニューカム

スタン・スミス

この頃、部活で顧問の先生がトップスピンを教え始めました。もちろんボルグが活躍し始めたからです。フラット、スライスが主流だった時代に、トップスピンのマッケンローのサイドをいとも簡単に抜く姿はとても印象的でした。逆に抜かれても果敢に前に出てボレーを決めた際のマッケンローのどうだと言わんばかりの勇姿に感動を覚えました。

当時の雑誌の記事に掲載されたボルグのインタビューコメントに、わたしのテニスを大きく変える言葉がありました。ウィンブルドン5連覇を成し遂げた（優勝の瞬間両手を天に向け、力なくその場に膝を付く姿は今でも覚えてます）彼ですが、確かコナーズ（タナーかもしれない）を破って4連覇を達成した際のコメントだったと記憶しています。マッケンローと準決勝を戦った際、マッケンローのサイドをダウンザラインにピンポイントで抜くショットに関し、インタビュアーがどうしたらあのようにエースを狙えるかと質問しました。その問いに対しボルグは次のような回答をしてました。



「わたしは点を狙っているわけではない。その辺を狙っているだけで、決まるのは偶然に過ぎない」（ボルグ談）

わたしはこの記事を読んでからテニスに対するイメージが変わりました。このように考えることで、ショットを打つのが楽になりました。また、相手に前に出られた時にも余裕が生まれました。同じコメントの中に、極端に言えば相手の右を抜くか、左を抜くかぐらいしか決めていないというような言葉、エースにならなかった場合でも、返ってきた球をもう一度同じように繰り返せば良いというような言葉もあったと思います。この話を聞くと、テニスはとても簡単のように思いませんか。この言葉をきっかけに、わたしのテニスが変わったことは事実です。今でもこれを実践しています。現実はその簡単にはいかないのですが・・・

対するマッケンローですが、ボルグにウィンブルドン5連覇を達成された翌年、再度決勝でボルグと対戦し、今度は見事初優勝を成し遂げました（わたしの中では、ボルグ5連覇の年の準決勝マッケンローVS コナーズ、マッケンロー優勝の年の準決勝同カードがベストバウトだと思ってるのですが・・・）。ボルグが引退した後、次の世代が台頭するまでは彼の独壇場でした。この後ライバルとして登場したのがイワン・レンドルですが、わたしの的には彼のテニスからあんまり学ぶことがなかったので、大きくは取り上げません（レンドルファンの方ごめんなさい）

マッケンローのテニスがわたしのテニスに大きな影響を与えたことは間違いありません。

ボルグのトップスピンの構えもそうですが、マッケンローのサーブの構え、ほとんどテイクバックしない小さな構え等、当時習ったテニスの構えとは全く異なるものでした。あれはプロだからできるんだと片付ける人（特にコーチ）もいましたが、これがそうではありませんでした。



マッケンローと言え、ボレーです。彼のボレーの姿をイメージしてください（左写真参照）。彼のボレーの特徴はラケットを持っていない右手です（彼はサウスポーです）。彼はラケットを持っていない手の平を、ラケットの面の角度と同じにすることで、体全体で壁を作っているそうです。打点の直前までラケットに右手を添えるバックボレーでは簡単にイメージできますが、彼の場合先に手を放してしまうフォアボレーでも、打点ではしっかり右手でラケット面と同じ角度を作っています（知ってる人なら「あ～そう言えば」と思いませんか？）。現在はラケットが進化したせいで、ボレーはしっかり押し出すことを意識することが大事ですが、ラケットを持っていない手でラケット面を意識し、体全体で壁を作るイメージを持つことは基本として今でも大事なことだと思います。体が正面を向いたままボレーするのを避けるため、ボレーする際、頭の側面（耳）で面を意識するという教え方もあります。

次にサーブです。今でも多くのテニススクールでサーブを教える際は、打つ方向に対し完全に横を向いて構えるように教えます（間違いではないです）。彼のサーブの特徴は、打つ方向に対して背を向けて構えることです。ジュニア時代に腰を痛めた彼は、このように構えることにより、自然に横回転をボールに与えるサーブを考え出しました。この話を聞いた頃、わたしも同様に腰を痛めていたため、これを真似するようになりました（今はちょっとフォーム変わってますが）。スピンサーブが一番安定しているという常識がありますが、スライスサーブでも十分安定したサーブを打つことができます。どんな球種のサーブを打つにしても、手打ち（肩壊します）を避けるため、体の回転およびラケットの回旋の力を利用して打つことが、サーブの理想的な打ち方です。

ボルグとマッケンローの話をしたついでに、個性の話をしたしたいと思います。日本テニス界は、かつて黄金時代とも言える時期がありました（詳細は「エースをねらえ」参照）。戦前の話です。戦後日本テニスは衰退します。その原因を、コーチの教え方だという意見があります。わたしも間違いではないと思ってます。戦後長く、日本のテニスコーチは選手を型にはめる教え方をしました。当時のレッスンマニュアルから逸脱した打ち方をすると、「体を痛める」という理由から、コーチは選手の打ち方を矯正してしまいました。これでは皆同じ打ち方になってしまい、個性が失われてしまいます。これは欧米でも同じだったかもしれません。ボルグ、マッケンローは、ジュニア時代同じような体験をしています。ぐりぐりのトップスピンを打つボルグ、サーブで相手に背を向けて構えるマッケンローは、当時のコーチから「そんな打ち方をしたら体を壊すからやめろ」と言われたそうです。レンドルも同じようなことがあったようです。彼の場合はフォアハンドストロークの際、脇

を空けて面を伏せたまま肘からテイクバックすることでした（真似はあまりお勧めできません。それこそ肘壊します。彼だからできたことと思った方が良いでしょう）。

このように、世界の頂点まで登りつめた選手が同様の体験をしていることが意味するのは、自分にあった打ち方があるということです。体を壊すような無理な打ち方は別として、中級レベルからなかなかレベルアップできないような人には、プロの打ち方を真似してみるのも良いと思います。自分で、自分独自のフォームを自然と作り出せるのが一番だとは思いますが、真似することはレベルアップにとって重要なステップだと思います。真似してだめなら元にもどせば良いのです。よく誰かの成りきりみたいなフォームの人を笑うことがあります。気に入った選手の真似をして自分がレベルアップできるなら、その人にとってはそれがベストの打ち方ということだと思います。

話をマッケンローに戻します。マッケンロー独特の打ち方の最後になりますが、先にちょっと触れたテイクバックの話です。テイクバックはボールにパワーを与える上で、大切な動作です。ボールによりパワーを与えるためには、遠心力を利用して体の後ろから打点に向かってラケットを加速することが必要です。ワイパースイングという言葉を知ったことがあるかと思いますが、上記のような考えから生まれた理想的な打ち方です。ところがマッケンローのテイクバックは、テイクバックしているのかどうか分からないような一見変な打ち方です。マッケンローが芝や全米オープンのような早いコートで7回も優勝した理由はこの打ち方のせいだと思ってます。ご存知の通り、彼はネットプレーヤーです。早くネットに出るため、コートに立つ位置は他の人より前に立ちます。前に立つことにより、より早いタイミングでの打点が必要となり、テイクバックを小さくする必要があったのだと思います。また、小さなテイクバックのおかげで芝コートのイレギュラーバウンドにも対応できたのでしょう。

この小さなテイクバックが、リターンの際有効となります。最近 TV で松岡修造が明石家さんまにテニスを教えているのを見ました。通常1、2のタイミングでラケットを振り出しますが、リターンの時は1つのタイミングで打てと教えていました。もちろんこれはタイミングを早くする必要性を教えていたのです。大きなテイクバックではこの早い動作に無理が生じます。リターンを通常のストロークと捉えず、リターンというショットというように認識し、ストロークよりも小さなフォームで打つことによりリターンに安定性が生まれると思ってます。特にビッグサーバを相手にする際は、いつもよりフォームを小さくする必要があります。

この時代に活躍した選手で、もう一人紹介したい選手がいます。ジミー・コナーズです。先に二度のウィンブルドンでのマッケンローとの準決勝の試合がベストバウトと述べましたが、本当に今でももう一度見たい試合です。ジミー・コナーズの方が年上で、落ち着いた表情の中鬼気迫る表情でプレーするのに対し、童顔のマッケンローがミスをする度に泣きそうな表情をするのに同情したわけではないですが、どちらかというわたしはマッケンローを応援してました。ボルグがベースラインプレーヤーだったため、ネットプレーヤーとベースラインプレーヤーの戦いはそれはそれで楽しめましたが、ネットプレーヤー同

士の戦いは現在ほどでは無いにしても、テンポが速く、一進一退のショットの攻防は目が離せませんでした。

コナーズのプレーで特筆すべきは、パワフルかつ正確なフラットダブルバックハンドです。毎回ジャンプしてるかのように打つフォームは、着地の姿勢にも無駄がなく、まるでダンスを踊ってるかのようなようでした。トップスピンドブルバックハンドのボルグとの違いは、ボルグのバックがトップスピンであるため安定して当然なのに対し、スピードを重視したら弾道が低くなるリスクのあるフラットで、正確無比な安定したショットを繰り出していたことです。ダブルバックハンドには(右利きを前提にした場合) 右手主導タイプ(シングルハンドと同じような感覚で左手は沿えるだけ。ボルグはこのタイプ) 両手均等タイプ(両方の手で同じだけ力を加えて振る。コナーズはこのタイプ) 左手主導タイプ(サウスポーがフォアハンドを打つ感覚で、右手は沿えるだけ。女性に多いと思う。セレシュなんかがこのタイプ)の3種類の打ち方があると思ってますが、どのタイプでも共通して言えることは、ラケットは最後まで振り切るといことです。そのために大事なものは、常に同じ打点、タイミングで打つことです。これは言うのは簡単ですが、実際にやろうとすると大変なことです。つまり、どんな球も速く追いつき、打つ準備を整えておく必要があるからです。彼を特筆した理由はそこにあります。ダブルバックハンドは、シングルバックハンドより余計にボールに近づく必要があります。それだけ不利な条件のショットにも関わらず、彼が片手でボールを返すところをほとんど見た記憶がありません。ダブルバックハンドを使う人は、ボール追う際に打点を十分イメージし、無駄な動きを少しでも無くし、コナーズのように常に同じように打つことを練習する必要があります。フォアハンドでも同じことができれば、フォアハンドに更に磨きがかかることは言うまでもありません。

この時代は、わたしにとって一番印象的な時代でした。わたしがテニスを始めた頃なのでそのように感じるだけかもしれませんが、現在までの各時代の中でテニス界がもっとも輝いていた時代のような気がします。

完成したのはここまでです。

以降はまだ作成途中・・・

4. ベッカー / エドベリの時代

ボルグ / マッケンローの後は、レンドル / ビランデルの時代かもしれませんが、彼等のテニスからあまり学ぶものがないので、ベッカー / エドベリの時代に飛んじゃいます（レンドル / ビランデルファンごめんなさい）。この時代に活躍した他の有名選手（息の長い選手もいるので、各時代にはダブって登場する選手があります）には、マイケル・チャン（ダブルバックハンドと言ったら彼。全仏決勝でレンドルにアンダーサーブして優勝した話は有名）、ジム・クーリエ（顔立ち悪くてぱっとしなかったな～）、ミヒヤエル・シュティツヒ（男前。テニスに関係ないか）等がいました。この時代すでにラケットは、オーバーサイズ、ミッドサイズ（デカラケがでか過ぎて飛びすぎたため、中間のサイズができた）に変わっていました。

4 大会を先に優勝したのはボリス・ベッカーですが、ステファン・エドベリのほうが個人的には好きなので、彼の話を中心にしたいと思います。

トップスピンサーブは彼のフォームが一番美しいと今でも思ってます。フラットドライブという言葉が登場したのも、彼のショットのおかげではないでしょうか。次の章で紹介するサンブラスが登場しなければ、わたしの中では彼が No.1 テニスプレーヤーでした。

バックハンドに苦手意識を持たないことが重要です。

彼の場合、美しいバックハンドに比べ、フォアハンドは若干見劣りしました（たまに手打ちっぽかった）。その点に優れていたのが、サンブラスだと思います。サンブラスの話は次章ですとして、もう一人のベッカーの話をしたいと思います。

ベッカーと言えばサーブです。「ぶんぶんサーブ」なんて呼ばれてました。

セカンドでもサーブを思い切り打つことは大事です。

次にベッカーで有名なのは、ジャンピングボレーです（ただし一般人はそんなショット無いと思ったほうがよい。これを真似してウォームアップの膝破いた人何人も知ってます）。ボレーは斜め前で取ること。

5. サンプラス / アガシの時代

ベッカー、エドベリの次に登場したのが、ピート・サンプラス、アンドレ・アガシです。ともに米国の選手で、ジュニア時代からライバルだったようです。サンプラスは残念ながら既に引退してしまいましたが、アガシはまだ現役です。

ゴラン・イワニセビッチ、トーマス・ムスター

前の章で少し触れたピート・サンプラスは、見かけの悪さから人気はいまいちですが、わたしの中では No. 1 テニスプレイヤーです。サンプラスは4年連続を含むウィンブルドン7回優勝、4大タイトルの優勝回数14回は戦後最高の記録となっています。

アガシ

彼がすばらしい理由は、ここまでに紹介した各時代を代表する選手のうち、唯一4大タイトルを全て優勝（年間グランドスラムという意味でないです）していることです。ネットプレイヤーである、ベッカーやエドベリ、サンプラスはアンツーカーコート（全仏）を一度も優勝できませんでした。逆にストロークプレイヤーだったレンドルやマッツ・ピランデル（ボルグ引退後に活躍したスウェーデンの選手）は芝コート（全英）を一度も優勝できませんでした。

6. 現在

最近子育てするようになってから、あんまりテニスを見なくなりました。ですから最近のテニス界がよく分かりません（選手の名前なんて特に・・・）

パトリック・ラフター（故障で最近ぱっとしないようです）、アンディ・ロディック（実力以上に人気高いようです）、ロジャー・フェデラー（人気いまいち）、ティム・ヘンマン（テニス発祥の地英国期待の星）

最近思うのは、わたし的にサンプラスが No.1 プレーヤーであることは間違いないと今でも思いますが、フェデラーも今後ひょっとしたらサンプラスくらい完成されたプレーヤーになるのではないかということです。彼も見かけの印象がよくないので、サンプラス同様人気はでなさそうですが。

など書いているうちに全米オープンが終了し、フェデラーが優勝しました（わたしの見込みがあっていた？）。今年の4大大会3つ制覇しました。年間3大会制覇は、1988年のピランデル以来です。フェデラー恐るべし・・・

7. 女子テニス界の歴史

男子の話は各時代ごとに章を分けましたが、女子は少し端折ります（女子部員の方ごめんなさい）。男子同様に時代を挙げるとしたら、エバート/ナブラチロワの時代、グラフ/セレスシュの時代、ヒンギス/ウィリアムズ姉妹の時代、現在のように分けられるでしょうか。エバート/ナブラチロワの時代の以前にはビリー・ジーン・キング（キング婦人）、マーガレット・スミス・コート（コート婦人）、イボンヌ・ゲーラゴング等が有名です（お蝶婦人は架空の人物）。もっと前になると女子プロ第一号のスザンヌ・ランラン、女子で始めてグランドスラムを達成し、リトル・モー（同名の映画にもなった）の愛称で呼ばれたモーリン・コノリー等の選手が活躍していました。

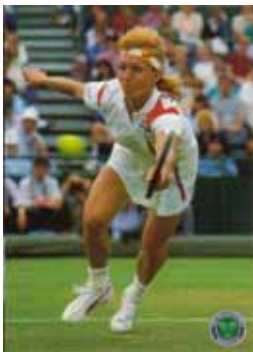


スザンヌ・ランラン



モーリン・コノリー

わたしがテニスの影響を受けたのは、なんと言ってもナブラチロワです。
リンゼー・ダベンポート、マリア・シャラポワ17歳でウィンブルドン初優勝



8. ラケットの進化

テニスを教えるのにラケットの話は関係ないかもしれませんが、わたしの中では関係あると思ってます。先に述べたように今ではラケットはデカラケしかありませんが、わたしがテニスを始めた頃は、ノーマルサイズでした（当時はそれしか無かったので、後からできた言葉です）。今思うと、ミニサイズと言ってもおかしくないです（よくあんなんでテニスしてたよな～）。しかも素材はウッド（木）でした。

コナーズが使用していたウィルソンの T2000 は、スチール素材を採用した画期的なものでした（当時かなり高額でした）。デカラケ、ミッドサイズ、プリンスのオーバーサイズ（110平方インチ）

素材、グラスファイバー

ラケット軽量化 450、350、

消えていった人ボルグ、レンドル

逆に活躍した人ジョン・ロイド、パム・シュライバー

自分にあったラケットを見つけることは、その後のテニス人生を大きく変えると言っても過言でないと思います。特に章立てて触れませんが、ガットも同様です。ラケットの進化とともにガットも進化しています。最初からラケットにガットは張ってありません。ラケットとガットは別のアイテムです。ラケットにマッチするガットを見つけることも重要です。ただ、わたしの実感として、市販されている数百（それくらいはあると思う）あるラケット、同様に数百あるガットの組み合わせは何通りになるか・・・自分にあったラケット、ラケットにあったガットを見つけるのは至難の技です。

9. ストローク

10. ボレー

11. サービス

12. リターン

13. スマッシュ

14. 戦術